

古高4年間で僕が生徒に問いかけてきたこと

地歴公民科 玉利 泉

この4年間を通じて僕が古高生に問いかけてきたことは、一言でいうと「みんなは一人ひとり自立ができますか？」ということだったかと思う。

以前、2年生の学年集会で生物学者の池田清彦の話を紹介した。彼によれば、鳥類や哺乳動物あるいは魚や両生類など群れをなして生活している動物は外敵から自身の身を守るために仲間と同調する習性を持っている。孤立しているより仲間の中にいた方が身の安全を守れるからだ。そして、ヒトも動物であるので基本的には仲間と集団生活するようになってきているのだが、一部には新しいことをしたがる本能も持ち合わせていて、進化はそうした少数派によってもたらされる、と。

僕はもしかしたらそういう少数派に近いヒトなのかもしれないけれど、他人のしないことを自分で成し遂げた時の歓喜が格別のものであることを幾度か体験したことがある。このことについては、昨年の古高だより2月号で「僕は勉強とどう関わってきたか？」で紹介した。さて、自分の話はこれぐらいにして、君たち古高生の話に戻ろう。

僕は古高で主に生徒会の仕事に関わらせてもらったのだけれど、平成25年度と今年度に執行部の面々との瀬戸内や奄美のことを自分たち自身で考えてもらう機会を得た。前者は、アマミノクロウサギを保護するために日本ナショナル・トラスト協会が町内の土地を取得する計画に参加して執行部とともに募金活動を行ったこと。後者は、島内4高校にアンケート調査をして文化祭で「奄美・琉球の世界自然遺産」について執行部とともに発表したこと、である。

この二つの機会を通じて「異邦人」としての僕が君たちに伝えたかったのは、地元瀬戸内の自然環境保全に誰も手を挙げようとしなないのはなぜなのか——当時、町の担当者に問い合わせた時点では誰も名乗りがなかった、あるいは、アンケート調査で「奄美・琉球の世界自然遺産」について知らない人の方が多かった、つまり地元のことなのに関心がないって一体どういうことなのか、ということだった。

これは難しく言うとアイデンティティの問題なのかもしれないのだけれど、別のアンケート項目では自分たちの島に強い愛着を持っているのに、残念な気がします。どうか、自分たちの住んでいる郷土についてより関心を深めることで、「自分探し」をしてほしい。人生は試行錯誤の繰り返しで、うまくいくことよりいかないことの方が圧倒的に多いことを実体験し、その中から「自分」というものを作りあげて「自信」や「誇り」を持ってほしいのです。そういう人たちがこの奄美にたくさん出てくれば、大学もダントツの独自産業もできるのではないのでしょうか。

では、以下に今年度、本校生徒会が発表した「奄美・琉球の世界自然遺産」について紹介します。又、その後、この発表資料にもとづいたアンケートを他校生徒会にもお願いし集約したところですが、他校分の回答には公開については了承も必要ですので、ここでは本校生徒会の回答分を合わせて提示します。